

經濟叢論 每月一日發行
 第四十七卷第一號 昭和十三年八月一日發行
 大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

京都市帝國大學經濟學會

經濟叢論

第四十七卷 第二號

昭和十三年八月一日發行

(禁轉載)

論叢

貨幣は被覆なりや……………文學博士 高田保馬

日本國民經濟の根本性格……………經濟學博士 石川興二

統計機關論……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

連繫貿易制(Link-system)に就いて……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

純粹理論經濟學と日本國民主義……………經濟學士 柴田敬

理論經濟學との間の距離……………經濟學士 德永清行

支那經濟に於ける銀の地位……………經濟學士 青山秀夫

ワルラスに於ける動學化の問題……………經濟學士 青山秀夫

近世絞油業の生産機構……………經濟學士 住谷勇二

說苑

資本及び資本形成理論の二元性……………經濟學士 中谷實

ドマンデヨン、村落と田舎共同體……………經濟學士 宮本又次

附錄

彙報

外國雜誌論題

ドマンヂヨン・村落と田舎共同體

宮本 又次

—

本稿は現巴里大學地理學教授 Albert Demangeon 氏が一九三三年 *Annales de Géographie*. No. 238, XLIIIe Année, Juillet, 1933 誌上に發表せる論文 *Villages et communes rurales* の大要を紹介せるものである。同論文は單に聚落地理學上の名論文たるに止まらず、農村史の立場よりするも示唆に富めるものである。

茲に田舎共同體と云ふは居住民と開墾された地域を持つ家屋の集りであつて、その人々は隣保共同的な利益を有し、そのため、兎も角他の集團のものよりも遙かに緊密な社會・經濟的關係を以て結ばつてゐるものを指す。而も歴史的進化の過程に於て吾人は田舎共同體に關し基本的な三型態を認めることが出来る。第一

は原始的な田舎共同体 (La communauté rurale primitive) であつて、農業のあまり進歩せざる段階に於て認められる。即ち土地への勞働は自らの手なる要具の援けにより行はれ、家畜は無く、殆ど總て婦人の手によつてなされる。耕作地は不斷に處女地の開墾によつて更新され、そのため村落の移動が必然となり、云はゞ永續的の村落がない。第二は組織化村落共同体 (La Communauté villageoise organisée) で、定住的農業の結果生れたものである。定住的農業と云ふのは常に同一の土地を利用し、家畜や鋤を使用する男子によつて行はれる農業で、これに伴つて耕地の細分や共有財産や土地の定期的割替への如き共同的慣習が生ずる。第三は近代的田舎共同体 (La communauté rurale moderne) で、これは本質的に孤立的な農場に住む耕作者と交易の中心であり共同体の行政の中心である村落とから構成されてゐる。これは西ヨーロッパの國々及び米合衆國に於て屢々見出される形態である。然らば如何なる勢力、如何なる原理が、かゝる村落共同体の形態の形

ドマンゲオン・村落と田舎共同体

成と進化とを導き出したのであらうか。

二

まづ原始的田舎共同体 (La communauté rurale primitive) に就きて見よう。この段階に於ては農耕は素手にて行はれ、たゞ木棒又は木鋤を持つに過ぎず、鋤も家畜も使はなかつた。農生産は更に更に新しく開墾する方法により不斷に耕作地を創定することによつて行はれた。これは現在の熱帯アジアの未開人に於て認められるもので、森林伐採及燒棄の方法がとられた。ジユム (Jum) と稱せられるものもその一例で、まづ小丘の傾斜の一角を選定し、十二月から次の年の二月に至る寒冷期にその一角の樹々を伐採し、三月の末迄伐り倒せる樹々を放置し、乾燥した上、火を付け、四月に至り、その灰の上に米・粟を播き、二・三回その原の草取をした上、七月には粟の收穫をなし、米は八・九月に取り入れた。而してジユムの地は二年間耕作に繼續使用すると、少くとも七年間は拋棄した。植民以前のイロクワ人も亦同様な方法を採用してゐた。

第四十七卷 三〇一 第二號 一四三

而してこの場合、漸次休閑地にして行くため、開拓地は次第に分散し易く、益々村落から遠い距離に擴がつて行つた。かゝる耕作様式は村落をして移動せしめる。馬來半島のサカイ族 (Sakai) は森林内に放浪的生活をなし、森林開拓から森林開拓へと居を移して行くので同一場所に一年の中三ヶ月と暮すことが無かつたと云ひ、同じく昔時の印度人は十年乃至二十年の間隔を置いて村落を移す習慣を持つてゐた。所謂ジユム耕作法は、地力の消耗につれて新しい空地を開拓し行くので、轉々と森林中を行かねばならず、益々新しき場所を求めて行く。移動は地力消耗以外の理由によつても實現せられた。火災や流行病により、又迷信的な凶兆の下で村落共同體の移動がなされた。

農業が少しでも粗放的で無くなると、居住の不安定性が無くなる。村落地域の内部に於て、人口が大いに増加し、その周圍に任意に處分し得る土地が狹隘となつた時、休閑期は短縮せられ、次第に永久的繼續的な耕作法が採用される様になる。これと共に永久的居住が

打ち建てられる、概して山間地帯の住民はジユムの方を實行してゐる場合にも、平原地方のものは既に原野に灌漑をほどこし、その傍に定住してゐる。又極東諸國に於て原始的放浪村落を永久的村落共同體に轉形せしめる上に最も寄與せるものは米の耕作であつた。米の耕作は幾多の固定費を要せしめたから、かく投下され、組織化せしめられた土地は他の目的に使用することが出来なかつたのである。

原始的農業社會は、一團の家屋と開拓された土地とからなれる社會單位で、所有權はこの社會に屬した。各家族はその原野を利益し得るも、それが所有は村落共同體に屬した。而してかゝる村は防衛の中心として特徴づけられてゐた。各村落はかゝる防禦の中にあつて種族よりもつと現實的に、より強固に旺盛なる生活力を以て結びつけられてゐた。村は傳統的な會議を主宰する酋長により統治せられ、彼は村を代表した。各村落は獨立の一體をなし、それ自身の設備を有し、共同集會所を有してゐた。

要するに二つの事柄が原始的村落共同體を特徴づけてゐた。第一は程度の差こそあれ、ともかく周期的に行はれる移動である。第二は村落共同體の内部に於ける、親密なる家族團體的共同の役割である。後者は土地享有の権利が歸屬するのは個人の家ではなく、共同體自身であると云ふことを意味する。これより次第に居住が永久的となり、個人的家族の獨立を現實にする様になると共に、組織化村落共同體の制度が出てくるのである。

三

一定の土地の上に建てられた耕作者の集團が、時あつて、その成員各自の安全を確保するために、土地の使用及所有を組織化しようとする様になり来る。これは農業經濟の原理から出で來つたものであつて、茲に采地の細分・共有財産の存在・土地の周期的割替なる三つの農耕制度が生れる。

采地の細分は同質の土地を耕作者に與へたいとの要

求から、出で來つたもので、村の相異なる土地を各人に一部分づゝ分配せんとする必要から起つたものである。十六世紀以前の英國に於ては到る所にこの細分が存しダンヌマルク・露西亞・佛蘭西・印度にも存した。次に共有財産 (biens communaux) の存在は、村落共同體の領域到る所に認められた。可耕の土地は共同體の耕作者間に分配せられ、不分割のまま残された特定の土地は共同體の所有に残され、専ら家畜の維持のため使用された。最後に周期的な土地の割替は増加し行く人口にその起源を求むべきであつた。處分し得べき土地の分量は勢力ある家の増加するに従つて減少すべき傾向があつた。而も若き人々はその分け前を要求する。かくて土地の分配を規則正しくせんがため、周期的な分割が行はれる様になる。かくる三つの制度を有する村落共同體の内には優れた系統的な組織があるに至つた。組織化村落共同體 (La communauté villageoise organisée) と稱する所以である。そこには寺院・教會の如き永久的の設立物があり、寺院又は教會の使用は

村落の連帶性に關する最もよき徴候の一であつた。又集會所・休息所があり、共同の水車・共同の竈があり、又共同體に屬し、そのために仕事する職人がゐた。靴屋・理髮師・鍛冶屋・陶工・油絞がゐたのである。

村落共同體は如上の姿を持ちつゝ、永い間、殆ど一の獨立の單位として存し、それ自身それに満足し來つたが、既にして中央及西部歐洲では、その存在が危くされるに至つた。これは家內的消費のためだけではなく、擴大せる市場のために、商業的精神が生産の觀念と共に、早くから浸潤せる國々に於ては、村落共同體の不便が早くから感ぜられたからである。即ち經濟的發展が一定限度以上に達すると共同的使用や農耕上の諸拘束を不都合な框とするからである。英國の加きに於ては、最早共同體が存しない。耕作者は村には住まざ、孤立して農場に住み、そこには何等の組織もない。

四

近代的田舎共同體 (La communauté rurale moderne)

と云ふはサンダーソンの命名にかゝるもので、分散せる農場を含み、これ等が商業的・社會的目的のために結ばつてゐるものを稱する。これは米合衆國に於て普く見られるもので、これが成立には特定の農業的條件(例へば良地の豊富)及社會的條件(安全)の外に、人間がある程度の自由を享受するものなることを前提としてゐる。合衆國に於てもヨーロッパの植民が最初にとれる形態は近代的田舎共同體ではなく、寧ろ母國のそれに似通つた村落共同體 (communauté villageois) であつた。英國の同じ村から來た移民達が集團的な家屋を建てたいと望んだのは當然でなければならぬ。この集團的居住はアメリカインデヤンに對する共同の防禦として、又宗教的組織のために役立つた。のみならず讓渡制度採用の由來が茲から出て來た。讓渡は個人に對してではなく、土地所有者の團體に對してなされ、寺院や學校のための幾分の土地を留保しつゝ、各個人にはその持分の土地があてがはれた。これ等最初の移民は半獵半農であつて、防禦的な集團を打ち建て、殆ど軍

隊的な性質を持ち、一人の酋長の指揮の下にあつた。かゝる要塞又は足場から、森林中に開拓された空地に出かけては耕作に従事した。各團體は樹々を伐採し家屋を建造し、玉蜀黍の栽培をするために相互に扶助し合つた。併しこの植民の方法は、幾干もなく、次第に安全が個人的居住を可能にするにつれて、變形するに至つた。殊に南北戦争以來、孤立せる農園による人口定住が、植民の普通の形態となり、無限に擴がれる土地が鐵道に沿つて拓かれ、完全なる安靜の下に置かるゝに至つた。かくて全く分散的な田舎聚落が出来上る結果となつた。併し、それは古代社會の聚落とは事變り、組織的ではなく、緻密なる社會的結晶の點が無くなつてゐる。

アメリカに於ては土地區劃に二つの種類があつた。郡區 (country) と町區 (township) とである。各郡區は若干の幾何學的な規則正しき形の小地區に分れてゐた。そして町區は植民地を組織し、土地の租借割當をなす場合に區劃された。この地區の内部に於て、居住

ドマンデヨン・村落と田舎共同體

者達の意志は纏まつてゐず、その住民は互に孤立して居住し、時々祖先を同じくし、血縁を共にする共同體もあつたが、これは例外であつて、假令距離に隣接關係があつたにしても、それ以外の何者でもなかつた。併しかゝる地域にも次第に共同體としての組織が見らるゝに至る。同じ教會に通ふことにより、或時は同じ銀行を使用することにより、又同じ商人と賣買する習慣によりて結びつけられるに至つた。鐵道のステーション、教會、學校等はその地域の中心となり、共同體を組織づけるものとなる。殊に學校はその社會生活の中心核點となる傾向があり、これを中心として近代的田舎共同體が形成される。而も近代的田舎共同體の結合は基本的には共同の利益を眼目とし、單なる安寧の要求ではなく、共同一致して、家畜流行病を防禦し、聚落としての利益を主張し、農業經濟的保護をすることにあつた。即ち村人が共同體を組織することが利益であり、この利益を縁として近代的田舎共同體が形成されてゐたのである。

第四十七卷 三〇五 第六號 一四七